
少尉と軍曹3

hiromaru712

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少尉と軍曹3

【Nコード】

N4208BA

【作者名】

hiromaru712

【あらすじ】

「ポエム24」という遊びがある。

Twitter詩人・歌人が集い#poem24というハッシュタグで午前零時丁度に決められたお題に沿った詩や歌を一斉にPostするという、新世代の雅な遊びだ。

開催日程は不定期。開催告知も不定期。お題提案者は毎回参加者の中から選ばれるが、その全てを主催者である若きTwitter詩人が任意に（有り体に言えば気紛れに）決定している。参加者はその詩人のアイコン（本アカウントは頼杖の男性イラスト、ポエム2

4用サブアカウントはメロンパンを頭に載せたキツネ少年キャラの一挙手一投足に自然ハラハラドキドキすることになる。この物語はポエム24参加者である著者が、そのハラハラドキドキの主催者観察風景を擬人化し、Twitterタイムライン上に主催者のツイートがある度にタイムリーにリアクションとしてPostしていたものを、ほぼそのまま纏めたものだ。ツイートを順に貼り付けただけなのでお見苦しい点も多々あるかとは思いますが、そういった事情なので御容赦願いたい。なおコンピュータや情報関連のそれっぽい用語や単位、数値は架空のものであることに留意されたい。

F o x t r i a n g l e

【『少尉と軍曹』はフィクションです。実在の人物、団体、機関とは一切関係ありません】

軍曹「関連ツイートなし。メロンパン値現在0.8mrp。笠岡沈黙。開催兆候なし。」大槻「よし。…所で軍曹。君は短銃射撃が上手いそうだな。」「どうでしょう。ゲームの成績は良いですが。」

「二曹は格闘技、少尉は狙撃…。図ったように射程違いか。」「各々の人付き合いの仕方と同期してますね。」

二曹「失礼します。…お見舞いに参りました。」少尉「ああ、二曹。わざわざすまないな。」「お加減いかがですか?」「私自身は痛み止めさえあれば…消毒と包帯替えの時のみ通院で大丈夫だと思うんだが、肺は油断禁物だそう。恒常的に外気が出入りする器官だから。退屈な一週間になりそう。」

軍曹「笠岡より転送ツイート。メインモニターに出します。」大槻「これは…詩、なのか?」「これ自体は…どちらかと言うと詩、とは言いつらいですが。」「ですが…なんだ?」「こういう感性や生き方は…詩人らしいと言えるのでは?」「ふむ…なるほどな。」「そういう意味ではこれも…詩、ですかね。」

二曹「お見舞いに…リンゴ持って来ました。」少尉「リンゴ…。」
「どうかしました?」「いや、ありがとう。」「剥きますね。」
「…。」「なんです?」「いや、私服の君を見るのは初めてだ。新鮮だな、と。」「…変ですか?」「君のキャラに合っていて…良く似合ってる。…可愛いと思うよ。」「…?」

二曹「……………」少尉「……………」剥けました。どうぞ。「ありがとうございます。頂きます。」……………」美味しい。上等のリンゴだ。奮発したな。「いえ、そんな。あ、入院中退屈なんじゃないかと…雑誌や小説を適当に見繕って買って来たんです。置いておきますね。」何から何まで…気が利くな、二曹。」

石野「邪魔をするぞ。おや…先客か。」少尉「司令！」二曹「え！司令？…おっ…お疲れ様です！」石野「楽にしている。退屈してるんじゃないかと思舞いに来たが…逆にお邪魔だったかな？」少尉「いえ。お心遣い、痛み入ります。」二曹「……………」石野「お、リンゴか。一つ貰うぞ。」

石野「田川少佐だがな、意識こそまだ戻らんが…峠は越した。取り急ぎ命に別状はないそうだ。」少尉「…そうですか。」石野「気に病むな。体面を保つ為に、有色人種の学生をスケープゴートにしたCIAに100%責任がある。学生とその家族は気の毒だとは思いますが…運が悪かったんだ。」少尉「……………」

石野「…にしても時間が経てば人は変わるな。貴様はリンゴだけは大学の苦手だったろう？」二曹「え？」石野「トラウマがあつて口にすると気持ち悪くなるんだつたな。今は平気なのか？」少尉「…ええ。」石野「だが読書の趣味は変わつてない。綾辻行人、島田荘司、京極夏彦…貴様の部屋で見た本ばかりだ。」

二曹「…少尉の…お持ちの本。」石野「これは私からの差し入れだ。桃の缶詰めとこれは缶切り。使い捨てのフォーク。バイクのとクロスワードパズルの雑誌。筆記用具。ノンアルコールのジントニック。それから…今日は貴様の誕生日だったな。」二曹「た…誕生日…日…？」石野「誕生日おめでとう、少尉。」

石野「子供っぽいかとは思ったが…バイクの模型だ。マルチイストラーダ1200。捜したがなかなかないものだな。工具と塗料はオマケだ。これで暫く暇は潰れるだろう？」少尉「ありがとうございます。」二曹「あの、私…用事を思い出しましたので…失礼します。」石野「なんだ、気を遣う事はないぞ。」

石野「少尉と私は、今は別に恋人同士という訳ではない。単純に上官と部下だ。にがやかな方が少尉も気が紛れるだろうし。」二曹「…いえ。本当に用事なんです。すいません少尉。なんか…私のお見舞い。」少尉「二曹。君の気持ちは伝わった。リンゴは…美味しかったし、好きな小説は何度読んでもいい。」

二曹「…じゃあこれで。失礼します。」少尉「ありがとう。二曹。気を付けてな。」二曹「…はい。」

二曹（何やってんだろ…あたし…。）

軍曹「マルヒト回る。関連スイートなし。メロンパン値1.6m r pから緩やかに下がる。笠岡沈黙。兆候、ありません。」大槻「よし。ログを送信してクローズだな。…少尉は今頃どうしてるかな？」
「美人看護婦に鼻の下を伸ばしながら、検温でもされてるんじゃないですか？」

少尉（…なんか…疲れたな…。）

軍曹「ちいーつす。調子どうですか？少尉。」少尉「おはよう。軍曹。挨拶はちゃんとしろ。すまないな、気を使わせて。」
「日頃お世話になってますから。これお見舞いです。」
「…携帯ゲーム機？見たことない型だ。」
「ファミコンのカセットが使える携帯機です。」

レアでしょ？」「…どこで買ったんだ？」

軍曹「これ。カセットです。『カラテカ』と『トランスフォーマー・コンボイの謎』。」「少尉「ありがとう。…貰っておいてなんだが、私の記憶が確かなら…ファミコン3大クソゲーの内の2つ、じゃないか？」「…知ってましたか。じゃあこれ。『いつき』と『けつきよく南極大冒険』。」「…ありがとう。」

軍曹「二曹、お見舞いに来ました？」「少尉「ああ、一昨日な。今読んでるのは二曹がくれたお土産だ。」「姑獲鳥の夏！名作ですね。」「読んだのか？」「DVDで観ました。」「実写映画版、か。」「本は厚くて。映画なら2時間で内容が分かります。」「…味気ない時代だな。」

軍曹「少尉、眼鏡じゃないですか。」「少尉「洗浄液を切らしてな。次に洗濯に帰る時までには眼鏡だ。」「写メ撮っていいですか？」「変なキャプション付けてネットに晒すのか？」「そんなことしませんよ。ハイ、バター。」「……。」

軍曹「二曹、なんか言っていました？」「少尉「それが…同じタイミンで司令が来てな。」「へえ…って、え？鉢合わせですか？」「ああ。二曹は用事があると言って程なく帰った。」「なんてことするんですか。」「…私のせいかな？」

軍曹「引き止めなかったんですか？」「少尉「司令が引き止めたんだ。気を遣うな、我々は今は別に恋人じゃない、賑やかなほうがいいとな。」「…で？」「二曹は本当に用事なんだと、それでも帰ったんだ。」「…少尉。まったくもう。」「…あのな。私にもどうしていいかわからない時があるんだ。」

軍曹「その後フォローとかは？」少尉「いや…特には。」「一言すまん、とかありがとうとか…ないんですか？」「わざわざ電話するの？」「Twitterですよ。アカウント交換したんでしょ？」「ああ、それは気付かなかった。確かに…って私と二曹がアカウント交換した事をなぜ君が知ってるんだ？」

軍曹「今DMして下さい。彼女きつと凹んでいます。」少尉「しかし今更…一昨日のことだぞ？」「いいから早く！」「…」二曹、一昨日は妙な事になってすまなかった。リングはあの後全部食べた。貰った小説も今読んでいる。誕生日の事は知らせていなかったからな、気にするな。心遣い、ありがとう。『』

少尉「これでいいか？」軍曹「まあ…80点ですね。」「……。送った。」少尉。二曹はきつとまた来ます。その時は、天気が良いれば散歩に、悪ければ喫茶店に誘って下さい。今回の埋め合わせに「…構わないが…君は何をプロデュースするつもりなんだ？」「何が生まれるかは少尉と二曹次第です。」

二曹「ヒトサン回る。関連ツイートなし。メロンパン値直近一時間平均0.4mrp。笠岡沈黙。開催兆候なし。」石野「つまらん。どうせなら開催時のオペレーションを経験したい所だが。」「年末に開催ペースを下げる、とアナウンスがありましたから。」「ふむ。」「毎日でも大変ですけど…無いのも寂しいです。」

二曹「少尉からあまりに手すきの際には本任務に差し障りのない範囲で『九尾』『ナインテイルズ』について資料を集めるよう申し送りを受けています。」石野「成る程な。所で二曹。君は少尉のことが好きなのか？」「がっ！…なっ…はい！いえ、ど、どういうご質問ですか？」「…いや、聞いた通りだが。」

二曹「今は状況中です司令。」石野「言いくければ無理にとは言わんが…私なりに部下との人間関係を慮つてのことだ。好きなんだな?」「…はい。」「ふふ…。」「…。」「何が可笑しいんですか?」「…いえ。」「少尉と私と君とで三角関係か、と思つたら…笑えた。気を悪くしたなら謝ろう。」「

石野「…で、どうするんだ?」「二曹「えーと…どうする、とは?」「少尉に気持ちは伝えたのか?伝えてないなら伝えるのか?伝えるならいつ?どうやって?…などなどだ。」「…言つていいですか?」「遠慮するな。」「誰も彼もが司令のように行きません。人を好きな気持ちについてなら…尚更です。」「

石野「もつともだ。この際だから正直に言おう。知つての通り、私は三月までに少尉を口説き落としとして南スーダンに連れて行きたいと思つている。」「二曹「…はい。」「立场上命令もできるが、それはせん。奴の自由意志で選択して貰いたいからだ。私との新たな関係を。」「…。。。」「私はな…。」「

石野「自分のこの性格が恨めしい。男勝りで合理主義的で…だから普通の女性の心の機微など、男性以上に理解し難い。もじもじしたり恥ずかしがったりする能力が欠如している。意識して演じても気持ち悪いだけだしな。」「…恥ずかしがったりする、能力。」「多分…女として恋人や妻や母親には向いてない。」「

石野「だから少尉に夫になってくれ、などとはとても言えん。向こうで子供たちを教育し、一緒に新しい国の親になってくれ、と言つのが関の山だ。」「二曹「司令…。」「何が言いたいかと言つとだな、この件に関する君の形勢は君が思っている程、不利ではない。」「…。」

石野「有利とも言えないがな。三月に向けて私は私なりに攻勢に出る。少尉にそばに居て欲しいと思う気持ちは、まず君より切実だ。私も必死だと心得ておけ。」二曹「一ついいですか?」「遠慮はいらんと言っている。まどろっこしい。」「何故私にそんなお話を?」「さあ何故かな?私にもよく分からん。」

石野「強いて言えば、同じ男を愛した同志だからかな。私の事を君に知っておいて貰いたい気持ちになった。」二曹「私、司令の事を誤解してました。」「だろ?自分で言うのもなんだが私は誤解され易さには定評がある。」二曹クッス「結局選ぶのはあの仏頂面の朴念仁だ。恨みっこなし、でな。」

少尉「…つくし!」

二曹「関連ツイートなし。メロンパン値0.8m r p前後で微動。笠岡沈黙。開催兆候なし。」石野「どうやら今日は無さそうだな。」「油断はできません。少尉曰く、化かすのが狐…だそうです。」「…そうだな。その通りだ。前言撤回だ。マルヒトまでは現体制を維持。意気は高く保て。」「了解。」

石野「『九尾』…『ナインテイルズ』の資料な、少しは集まっているのか?」二曹「いえ。今は何も。J C I Aでも過去に九尾と言う特務班があり、現在はナインテイルズと呼ばれる隊内セクトがある、という確度の高い情報は持っていたのですが、肝心のメンバーや実際の活動内容は調査中だったんです。」

石野「文化の防衛、か。」二曹「今、軍曹と相談して情報収集用の

オートマトンを作ろうかと言っている所です。対九尾専用の。」「
ほう。」「…高木少佐は空爆で落命しています。九尾の脅威度は、
陸幕二部やJCEIAのアセスメントより、かけ離れて高いかもしれ
ない…と少尉はおっしゃっていました。」

石野「成る程な。その為の予算申請か。」「二曹「予算申請?」「あ
あ。少尉がな。新PCは一台でいいからと、色々と物騒な物の予算
を申請して来てるんだ。」「…対物ライフルで狙撃されたりします
からね。」「導入希望の装備リストを見た時は過剰な装備に思えた
が…あながちそうでもない、かもな。」

石野「二曹、それと明日だがな。」「二曹「はい。」「急ですまんが
…午後から広島島の陸自技術開発局に行ってくれ。」「開発局?どう
行った任務でしょう?」「極秘の新装備のモニターに格闘技能の高
い人材が必要なんだそうだ。予定ではヒトヨン開始でヒトロクには
終わる。その後は直帰でいい。」「了解。」

少尉「……。」「【パチン】

少尉(…久しぶりだな…プラモデル。)

軍曹「ういーあーほーりん?ほーりんとうーらああい…よし。出
来た。少尉の眼鏡姿の写真パネル。」

二曹「フタヨン回る。TL異常なし。メロンパン値1以下で安定。
笠岡沈黙。兆候、ありません。」「石野「狐が現れたらデフコン3、
お題交渉が始まったらデフコン2、お題が投下されたらデフコン1

「…だったな。」「はい。」「五分前に暗転、二分前にアナウンス？」
「その通りです。」「ポエム24、か。」

石野「何事もないな。一息入れるか？」二曹「ですね。コーヒー入れます。司令はブラックにミルクを三滴、でしたね？」「よく憶えてたな。…だが正確ではない。三滴は自分で入れるんだ。」「ご自分で？」「三滴では味は変わらん。かき混ぜたコーヒーの表面にミルクを三滴垂らして…模様を愉しむのさ。」

二曹「え？解散？」石野「どうした二曹。」「…TLに『東京事変解散』とのツイートが。」「トーキョー事変？クーデターか？いつの事変だ？記憶にない争乱だ。」「いえ…JPOPのグループです。」「…物騒な名だ。そういうのは疎くてな。AKBがなんの頭文字かも知らん。」「…頭文字なんですか？」

二曹「関連ツイートなし。メロンパン値0.2。笠岡沈黙。マルヒトまでマイナス5、4、3、2、1…今！プラス1、2、3、4、5…。」石野「状況終了。現時点でログをクローズ。秘匿圧縮、規定各位に送信後、クローズチェックを実施。退室予定、マルヒトフタゴ。」「マルヒトフタゴ退室、了解。」

二曹「クローズチェック終了。残るは我々の退勤のみです。」石野「よし。退勤しろ。ご苦労だった。二曹。」「お疲れ様でした。」

石野「二曹は駅か？送ろうか？」二曹「いえ。運動がてら歩いて帰ります。」「恋敵の助手席は気詰まりか？」「逆です。ライバルが気持ちのいい方と分かったので…気分が良くて。月でも見ながら歩きたい気分です。」「そうか。私も君が相手なら総力を惜しみなく出せる。覚悟しておけ。」「お手柔らかに。」

「曹」

…約束はいらないわ？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4208ba/>

少尉と軍曹3

2012年1月11日02時55分発行